

第一章 自然神学とその再構築

第二章 「宗教と科学」関係論の基礎

- | | |
|---------------------|-----------|
| 1 形而上学再考 | 6/17 |
| 2 ホワイトヘッドの宗教論 | 6/24 |
| 3 プロセス神学の挑戦 | 6/31, 7/1 |
| 4 プロセス神学と「宗教と科学」関係論 | 7/8 |

第二章 「宗教と科学」関係論の基礎**1 形而上学再考**1 - 1 問題

1. 「存在するものの、また実践と認識のもっとも根源的な諸条件と諸形式を論究する哲学的分野についての伝統的な名称である」⁽¹⁾。
2. キリスト教思想と形而上学との関わり：ヘブライズムとヘレニズム、あるいは聖書の宗教とギリシャ的存在論、「在りて在る者」をめぐる問題群⁽²⁾ 出エジプト記三章一四節のギリシャ語訳において「ある」という存在概念と神概念とが結合されたこと。
3. 「ある」という存在概念に伴う抽象度の高い思考方法 + 「あなたたちの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である主」(具体的象徴的)：神の名の全体
4. 「キリスト教思想と形而上学」という古典的問題：現代の思想状況において、「宗教と科学」の関係論を論じるための基礎論を構築する。宗教と科学との関係理解にとって、形而上学は決定的な位置を占めており、宗教と科学の関係論を十分な仕方で展開するには、形而上学的基礎が必要となる。
5. 1960年代以降の思想動向、宗教と科学の対立図式の克服への取り組み
「宗教、科学、そして哲学の対立の時期は原理的には過ぎ去った。もちろん、より古い思想時代に逆戻りしてまだ生きているような人も存在してはいるが。我々は寛容の時代に生きている。しかしそれは満足のゆくものではない。なぜなら、それはお互いを認め合っ
てはいても、統一することはないからである。……我々は常に再統合の時期に向かって努力している。……協力は今日可能な事柄である。これは多くの場所において始められており、これがますます力をまして現実のものとなるという希望を私は表明したい」⁽³⁾
6. 「科学研究と神学との接点は、科学と神学の両者における哲学的要素の中にある。したがって、神学の特殊科学に対する関係は神学と哲学の問題になる」⁽⁴⁾
7. パネンベルクやギルキーの試み⁽⁵⁾

1 - 2 現代思想における形而上学批判

8. 現代思想における形而上学批判⁽⁶⁾
9. 「ここで述べておくべきことは、形而上学者の言明がナンセンスなのは、単にそれらが事実的内容を欠いているという事実から来るのではなく、この事実と共に、それらが

アприオリな命題ではないという事実からも由来するということである。」⁽⁷⁾

10. 基礎付け主義の問題⁽⁸⁾

11. カント哲学における形而上学への二重の評価、「人間は本性的に形而上学的である」と「形而上学的問いは人間の理論理性の能力を超えている」という二つの命題

12. 「人間の理性は、或る種の認識について特殊な運命を担っている、すなわち理性が拒けることもできず、さりとてまた答えることもできないような問題に悩まされるという運命である。拒けることができないのは、これらの問題が理性の自然的本性によって理性に課せられているからである。また答えることができないのは、かかる問題が人間理性の能力すべてを越えているからである」、「この果てしない争いを展開する競技場がすなわち形而上学と名付けられているところのものである。」⁽⁹⁾

将来建設されるべき「形而上学の体系」⁽¹⁰⁾

人間の理性は、その自然的本性から言って建築術的（体系構成的）である。⁽¹¹⁾

13. カント ハイデッガー

形而上学の基礎付けから形而上学の克服への転回⁽¹²⁾

強い神（存在 神論の）から 弱い神への転回

14. 1920年代後半のハイデッガーの基本的な構想：カントの理性批判を形而上学の基礎付けとして読むこと。人間の認識の有限性 神の根源的直観に対する派生的直観（*intuitus derivativus*） にもかかわらず、アприオリな総合がなぜ可能かを人間存在に固有の存在構成の解明によって示すこと。悟性のカテゴリーと感性の形式を超越論的構想力という共通の根から捉え、さらにそれを時間性（根源的時間）として解釈するという議論の道筋を辿り、「存在は時間である」（『存在と時間』）との命題に行き着く。

15. 中期ハイデッガー以降⁽¹³⁾

形而上学を存在忘却（存在するものと存在との差異の忘却）としての西洋の歴史（存在の歴運）の文脈で論じる、形而上学は古代ギリシャ以降の西洋世界を規定している性起として、そして、近現代のニヒリズム 近代のヒューマニズムや科学技術もここに属する の源泉として位置づけられる。形而上学の克服という課題。

16. 形而上学 = 「存在 神論」(Onto-Theologie)において問題になる神は、抽象的普遍性と最高存在という特徴を持つ哲学者の神、いわば「強い神」。⁽¹⁴⁾

形而上学の克服 = 「強い神」観念の克服

共働者としての人間を必要とする弱き神⁽¹⁵⁾

ギリシャ形而上学的な強い神から、ケノーシスしたキリストとして神、信仰の弱き神への転回

17. ハイデッガーの形而上学的思惟への批判 レヴィナスの存在論的全体性の批判⁽¹⁶⁾

『全体性と無限』：形而上学と存在論を区別した上で存在論的思惟を批判。

西洋哲学においては存在論的思惟 自己完結的全包括的、他者に余地を与えない、外部が存在しない が支配的であり、⁽¹⁷⁾存在 - 神論を批判したハイデッガーも存在論的思惟を脱却していない。

他を共に還元する存在論の態度は、ハイデッガーが存在 神論の特徴として取り出した特性 存在するもの全体を包括する抽象的な普遍性 である。問題は自己の圏域の内に同化しその外部・他者を認めないという精神性、「強い神」・哲学

者の神の特性

- 存在論に対して倫理（他者の現前において私の自発性が問いに付されることとしての倫理）を、自己完結的全包括的思惟に対して、その外部としての超越を対峙
18. 認識論レベルでの批判（形而上学は無意味である）と、他者を排除あるいは支配（同化）しようとする意志や欲望のレベルでの批判 ⁽¹⁸⁾

1 - 3 形而上学再考の可能性

19. 形而上学批判を経て再び形而上学へ。形而上学的思惟、全体性や普遍性をめざす思想形成（上昇的な思惟）の不可避性。全体性や普遍性という思想の場は、宗教と科学とが、そして諸宗教が、相互にきり結ぶ地点。

「信仰の神学的な自己解釈は、単なる神学者の主観的関与を表現するものに過ぎなくなる」(Pannenberg[1988a], S.7)

20. 『形而上学と神思想』(1988)所収の「形而上学の終焉と神思想」「絶対的なものの問題」、『哲学 宗教 啓示、組織神学への寄与・第一巻』(1999)所収の「意味経験、宗教と神の問い」(1984) ⁽¹⁹⁾

21. 論文「形而上学の終焉と神思想」

「哲学は人間の生に根ざす生の意味への欲求に対応している」(ibid., S.15)、「有限な諸対象とそれらが与えられる自我とを超えて<上昇すること>こそが、総体としての<世界>を、それゆえ、その中にあらゆる個々の諸対象がその場を持つことになる全体を、視野の内にもたらずのである」(ibid., S.16)

形而上学とは、人間理性に本性的に備わった「一者の思惟への上昇」(ibid., S.18)の欲求、つまり世界を有意味な全体として捉えたいという欲求（さらには、自らの生を有意味なものにしたいという欲求）に根ざしている。

芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』世界思想社

pp.3-14

22. 論文「絶対的なものの問題」

「實在の統一性の理念なしには形而上学は存在しない。實在の統一性は、世界、コスモスとして、多なるものの、多様な個別的なものの秩序なのであるから、世界の統一性には、多なるものを統一性へと相互に秩序付け、相互に関連させる根拠の問いが結び付いている。」(Pannenberg[1988b], S.20)

経験の多様性あるいは實在の統一性

「主観性と主観外の實在との統一と差異は、経験意識の内で結び付いている」(ibid.)、「経験可能な實在の総体性の理念は任意の主観的な思想以上のものである。なぜならば、この理念は、何らかの形式において、経験される個々の対象を把握したり規定する条件だからである」(ibid., S.21)

「経験の諸対象は、このような対象の総体の部分として、別の諸対象との相違においてのみ<或るもの>である」(ibid.)

23. 「限界の思惟と共に、常に同時に限界の彼方にあるものもすでに思惟されている。たとえ、漠然とした仕方であっても」(ibid.)、「有限なものの把握がすべて無限なるものを含んでいるということは、シュライアーマッハーの『宗教講話』における宗教理論の

根本思想である」(ibid.)

24. 論文「意味経験、宗教そして神の問い」

形而上学を意味論の観点から再構築。現代の精神状況において、意味の問いが決定的な意味をもつという認識。⁽²⁰⁾

「意味空虚と意味喪失を前にした不安は、現代の生のテーマとして、意味の問いや意味の追求に関連している」(Pannenberg[1984], S.101)。

25. 意味概念：現代の言語理論（意味 指示、語 文 テキスト、発話 解釈といった論点をめぐって展開される）⁽²¹⁾

「語は本来その指示を文の内部において有している。その指示はそのときどきの文の連関から完全に切り離すことはできない」、「ここでわれわれは文連関における語の<意味>について語っているのである」(ibid., S.102)、「テキストの意味内実は語り手あるいは著者の意図にも解釈を通じた意味付与にも還元できない」(ibid., S.104)。

こうした議論はそれ自体興味深いものであるが、本論文のテーマである形而上学（意味
「言語の意味にとって重要なのは、語りの連関における部分と全体の関係性なのである」(ibid., S.103)

26. 意味論を言語から人間の経験（意味経験・日常性）へ。

「言語的表現の意味構造から人間経験の有意味性の構造へと注意を向けるとき、意味経験と宗教との連関が視野にもたらされる」(ibid., S.105)。

「文や語りの連関による語の指示の制約性の観点を、言語的テキストの分析から経験構造の研究へと転用」(ibid.)

27. 「他のすべての生から区別された自分自身の生の全体性について、わたしたちは直接経験の瞬間に特別な意識を有するわけではない。むしろ、自分自身の生の全体性だけではなく、実在一般の全体性が、感情においてわれわれへと現前してくるのである。それに対して、実在一般は、われわれの経験の地平として、あの感情に即した仕方では現前するのだが、それはきわめてあいまいな仕方においてである。実在一般のこのような漠然とした現前において、世界、自己そして神はまだ未分化である。この全体は個別的な経験においてのみ規定されるのである」(ibid., S.106)。

実在一般の感情における現前（=漠然とした仕方では感じ取られ）。世界、自己、神は未分化、個別的な経験に対してその地平である全体は「漠然とした彼方」(ein vages Darüberhinaus)として現れる。

「ディルタイは、規定されない無限の地平、つまりわれわれが感情において予期する全体を個別的な経験の地平として生の全体性へ、それもまずは自分自身の生の全体性へと制限する」(ibid., S.107)

28. 個別的な生から歴史へ。

個別的な生の場合と同様に、歴史的連関についても、全体と部分という意味構造がその有意味な経験を可能にしている（経験の有意味性の構造）

「歴史の終わりにおいてのみ、われわれの意味意識の真理あるいは非真理については最終的に決せられるのである」(ibid., S.110)、「歴史の終わり」(歴史の彼方)の先取り。

歴史の出来事 歴史の全体 歴史の彼方

29. 哲学的な歴史理論、歴史解釈学から質的に異なる問題領域へ。

終末論という問題領域、信仰の領域。⁽²²⁾「現在の意味経験の明証さは、信仰という形式、意味の先取りの叙述という形式をとる」(ibid.)。

「全体 部分」構造：「宗教経験において問われるべき全体（実在の全体性）の彼方としての終末論的地平 歴史の出来事あるいは個別的な生」という形態までに拡張され、個々の出来事は歴史の全体を規定する終末論的地平において、その最終的な意味を獲得することになる。

30. 言語の意味分析からはじまり、日常性（経験）の有意味性の構造を経て、歴史過程の全体を、そして最終的には終末論的地平を展望する道（「全体 部分」構造に即した形而上学的上昇）を辿る。

31. パネンベルクによる形而上学の再構築

「全体性」という問題を明確化。現代の思想状況で形而上学を再構築する場合に、意味論（経験の有意味性の構造分析）という方向付けが考えられる。

1 - 4 展望

形而上学の再構築の一つの可能性は、「全体 - 部分」構造（意味構造）の内に見出される。なぜなら、この意味構造の普遍化（言語 経験・日常性 歴史）は、まさに人間理性の備わった形而上学的上昇運動の具体化に他ならないからである。

意味の問い（無意味性や不安に駆り立てられた意味根拠の探求）は日常性・経験の内に根ざしており、ここに現代の精神性の置かれた状況を見ることができる。

宗教において、この意味の問いは顕わに提起されることになるが、その場合、それは実在の全体とその彼方の問いとして追求され、全体と彼方は具体的な象徴によって表現される。

キリスト教における終末論は、歴史の全体を規定する包括的地平を提示するという点において、実在の全体性についての宗教的で象徴的な表現であり、キリスト教的な仕方における形而上学的上昇運動の到達点といえる。

パネンベルクは、終末論的地平をギリシャ的コスモスの全体性をさらに包括する真の全体性 コスモスの生成という偶然性（＝神の自由意志に基づく）を含む点で と考える。科学と宗教の営みがこの全体的地平に包括されると言えるとしても、この全体性の定式化が「宗教と科学」関係論の基礎論を構築するのに適切か否かについては、さらなる議論が必要である。

32. 意味論に基づく形而上学再構築の可能性と「宗教と科学」関係論の基礎論⁽²³⁾

33. ギルキー：「科学、哲学（存在論あるいは形而上学）、そして神学」、「相互に区別されながらも相互に結合し合った解釈学的な諸探究」(Gilkey[1993], P.75)

と述べた上で、それらの相互関係を次のように論じている。

34. 「科学は（一定の先行理解に基づいて）特殊な存在過程の不変構造を探究し、その確認の素材と形式の双方について感覚的で量的なデータに訴える。哲学は（一定の選択された視野から）存在するすべてのものの普遍的な構造を探究し、経験全体の広さに訴える。こうして、哲学は科学や芸術において前提されている諸原理を、批判し定式化し定式化し直すのである。神学は、現実存在についての一つの視点に基づいて、科学によって提供され哲学によって描かれた構造の意味を探究する。その基本的な象徴は、それ自

身の宗教的伝統から由来し、文化的生の残りのすべてのものだけでなく、他の諸伝統とも対話するのである」(ibid., pp.75-76)。

35. 有意味性を求める日常的な生の営みという基盤 ⁽²⁴⁾

科学的思惟：その固有の場を特定の实在領域の中にもち、その領域の特殊な不変構造（法則）を探求する。

神学的な意味探求：

普遍化という仕方で形而上学的に上昇。両者の接点。

36. 「この領域において成功裏に成し遂げられた前進を強く経験した者であるならばだれでも、現実存在の中に顕わにされた合理性に対する深い畏敬によって動かされるのである。理解という道を通して、人々は、個人的な希望や願望という束縛からはるかに自由になり、それによって、理性の崇高さ 現実存在において具現化されているが、その最深の深みにおいては人間に接近不可能な に対する心の謙虚な態度に到達するのである。しかしながら、この態度は、わたしにはその最も高い意味で、宗教的であるように思われる。」⁽²⁵⁾

<文献>

(1) *Religion in Geschichte und Gegenwart. Vierte Auflage Band5 L-M*, Mohr Siebeck 2002, S.1171

Martin Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Vittorio Klostermann 1973 (1929) S.8

「アリストテレス自身が述べているところによれば、<第一哲学>のまさに本質規定の内に、著しい二重性が見られる。形而上学は、存在するものの存在するものとして認識であると同時に、そこから存在するものが全体において規定される存在するものの卓越した圏域の認識なのである」(ibid., S.7)。「形而上学は、存在するものそれ自体としての、そしてまたその全体における根本的な認識である」(ibid.,)。

(2) Paul Tillich, *Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality* 1955, in: *Paul Tillich. MainWorks 4*, de Gruyter pp.357-388

有賀鐵太郎 『キリスト教思想における存在論の問題』創文社 1969年(1981年)

山田 晶 「一 在りて在る者 - 序説 - 」、『在りて在る者』創文社 1979年 3-17 頁

(3) Paul Tillich, *Religion, Science, and Philosophy* 1963, In: J. Mark Thomas (ed.), *Paul Tillich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer 1988, p.172

Alister E. McGrath, *A Scientific Theology. Vol.1: Nature*(T&T Clark 2001), *Vol.2: Reality* (Eerdmans 2002), *Vol.3:Theory* (T&T Clarck 2003)

(4) Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.One*, The University of Chicago Press 1951, p.18

(5) Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress 1993

(6) Mark A. Wrathall(ed.), *Religion after Metaphysics*, Cambridge University Press 2003
Introduction: metaphysics and onto-theology pp.1-6

(7) A.J.Ayer, *Language, Truth and Logic*, Penguin Books 1936(1982), p.56

- (8) Alister E. McGrath, *The Foundations of Dialogue in Science & Religion*, Blackwell 1998, pp.11-14
- (9) A VII. 形而上学という思惟の上昇運動の現れは、カント以降の諸思想においてもかなり広範に確認することができる。以下、いくつかの例を挙げておこう。
- 「思弁哲学は、我々の経験のすべての諸要素が解釈可能なものとなる一般的な諸観念の首尾一貫した論理的で必然的な体系を構築する努力である。」(Alfred North Whitehead, *Process and Reality. An eaasy in cosmology*, The Free Press 1957(1929), p.5)
- 「純粹経験を唯一の實在としてすべての實在を説明して見たいといふは、余が大分前から有つて居た考であつた。」(西田幾多郎 『善の研究』、『西田幾多郎全集』第一巻 岩波書店 4頁。一部現代語表記に直して引用を行った。)
- 「科学は、体系的な思惟という手段によって、この世界の知覚可能な諸現象を可能なかぎり入念に仕上げられた総合にもたらそうとする、幾世紀をも経た努力なのである。大胆に述べるならば、科学は概念化の過程によって現実存在を後から再構成する試みである。」(Albert Einstein, *Science and Religion* (I-1939; II-1940), in: Albert Einstein, *Out of My Later Years* (= Einstein[1956]) ,The Citadel press 1956 p.24)
- (10) B XXIII
- (11) B 860-861
- (12) 芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、252-256頁
- (13) 『形而上学とは何か』(*Was ist Metaphysik ?*, Vittorio Klostermann 1969(1981)) の「序論」(Einleitung, 1949)、「本論」(1929)、「後書き」(Nachwort, 1943)を、書かれた年代順に詳細に比較する
- (14) Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967
- (15) 小野 真 「ハイデッガーの形而上学構想と(メタ存在論)とシェーラー」
『宗教研究』322、日本宗教学会 1999年、1-25頁
- (16) Emmanuel Levinas, *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*, Kluwer Academic 1971 p.36
- 「存在するものの知解可能性としてのテオリアには、存在論という一般的な名称がふさわしい。〈他〉と〈同〉に還元する存在論は、〈同〉の自己同一化としての自由、つまり、〈他〉によって疎外されることなき自由を増大させる」(ibid., p.33)のに対して、「形而上学は絶対的に他なるものをめざす」(ibid., p.21)。そして、この形而上学こそが、「西欧哲学を支配する全体性概念」(ibid., p.6)に基づくに存在論に先行し、倫理 「他者の現前によって私の自発性を問いに付すること」 に連なるものなのである。
- (17) 「戦争の存在論」(ibid.) 「支配の哲学」 「不正義の哲学」(ibid., p.38)
- (18) Jürgen Moltmann, *Trinität und Reich Gottes. Zur Gotteslehre*, Chr. Kaiser 1980, S.154-161,
 , *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr. Kaiser 1985, S.258
 , *Wissenschaft und Weisheit. Zum Gespräch zwischen Naturwissenschaft und Theologie*, Chr. Kaiser, S.29ff.
- (19) 1 . Wolfhart Pannenberg, *Metaphysik und Gottesgedanke*, Vandenhoeck & Ruprecht 1988
- a. Das Ende der Metaphysik und der Gottesgedanke (=Pannenberg[1988a])
- b. Das Problem des Absoluten (=Pannenberg[1988b])

2 . W. Pannenberg, *Sinnerfahrung, Religion und Gottesfrage* (=Pannenberg[1984]), in:
Beiträge zur Systematischen Theologie. Band 1. Philosophie, Religion, Offenbarung
Vandenhoeck & Ruprecht 1999

- (20) 「形式的な有意味性を越えて実際に人間の生の積極的な意味充実を指し示すような宗教的伝承の意義については、すべての日常的な意味経験に暗に含意された包括的な意味連関　これは、個々の意味を根拠づけているのであるが　への関係性を、その宗教的伝承が統合できるかによって示されねばならない」(Pannenberg[1984], S.111)。
- (21) Wolfhart Pannenberg, *Wissenschaftstheorie und Theologie*, Suhrkamp 1977, S.157-224
- (22) 「歴史的啓示は神性の特殊な顕現とは異なって、見る目をもつすべての人間に対して開かれている。それは普遍的な性格を有しているのである」(Pannenberg[1961], S.98)。
深井智朗 『超越と認識 20世紀神学史における神認識の問題』創文社 2004年、
特に171-174頁
- (23) 「パウル・ティリッヒは一九二五年に『宗教哲学』において、すべての個別的意味は意味連関によって制約されており、この意味連関の方は、無制約的な意味根拠に基づいている、と述べている。しかし、宗教意識によってのみ、この無制約的な意味根拠は主題化されるのである」、「日常的経験の意味構造に対する宗教意識の関係についての類似の規定を、わたしは、一九七三年に『科学論と神学』で提示した」(Pannenberg[1984], S.110)と述べている。
- (24) 「科学の全体は日常的思考の洗練させたものに他ならない」(Einstein[1956], p.59)。
「科学的体系の成層化」　一次的概念(感覚経験に結び付いた)から、二次的体系(一次的概念に論理的統一性を与える)を経て第三の体系(最小の論理的基礎概念によって構成され、感覚経験と矛盾しない最大の統一)に至る三つの層によって構成された上昇過程　。
- (25) Einstein[1956], p.29